

ラ・ポルトという名の俳優

戸口民也

16世紀末から17世紀初頭に活躍した俳優の中に、ラ・ポルト La Porte という役者がいた。フランスにおける近代的職業俳優の先駆けとしてはヴァルラン・ル・コント Valleran Le Conte が最も有名だが、ラ・ポルトはそのすぐ次の世代に属している。ヴァルランは1590年代初めにはすでに「著名な俳優」として知られていた⁽¹⁾。ラ・ポルトが芝居の世界に身を投じたのは1590年代の終わりごろと思われる。しかし、すぐさま頭角を現し、1600年にはすでに座長として劇団を率いていた。ラ・ポルトは1610年末に引退しているので、俳優としての経歴は10年あまりと短い。その間に、近代フランス演劇の黎明期を代表する人物たちと密接な関わりをもつことになる。彼の妻マリー・ヴニエール Marie Venière は、フランス最初の女優のひとりとして真っ先に名前が挙げられる存在である。彼が座長として率いていた劇団には、劇作家としての地位を確立する以前のアレクサンドル・アルディ Alexandre Hardy がいた。ヴァルラン・ル・コントとも提携し、共に舞台に立っている。本稿では、このラ・ポルトという俳優の太く短い役者人生を紹介しつつ、当時の劇団や俳優たちの状況についても述べることにしたい。

* * * * *

ラ・ポルトの本名はマテュー・ルフェーヴル（あるいはル・フェーヴル）Mathieu Lefebvre (ou Le Febvre) という。彼の出自と生涯を知るには、次の二つの資料が基本となる。

- ・マリー・ヴニエールとの結婚契約書⁽²⁾（1602年12月19日付 — 以下「結婚契約書」と略称）
- ・ルイ13世によるマテュー・ルフェーヴルの名誉回復のための開封勅許状⁽³⁾（1619年 — 以下「勅許状」と略称）

これらの文書によると、マテュー・ルフェーヴルはブルターニュ地方ラ・ロッシュ＝ベルナール La Roche-Bernard の出身で、1572年（または1574年）に生まれた⁽⁴⁾。父はアンドレ・ルフェーヴル André Lefebvre、母はジャンヌ・ベルトロー Jeanne Berthereau、二人とも息子の教育には熱心で、マテューが幼い時から学問を身につけさせようとした⁽⁵⁾。しかし、彼が「16歳になったとき、それは1590年のことだったが、この地方に内乱が起こった⁽⁶⁾」ため、彼は武器を取って国王アンリ4世のもとに馳せ参じた。1590年といえば第8次宗教戦争（1585～1598年）の真っただ中だが、とくに1588年ギーズ公暗殺に端を発し、1589年アンリ3世暗殺、アンリ4世即位と続く時期、戦乱が各地におよび、ブルターニュ地方にも波及したため、当時16歳（ただし「結婚契約書」の記述に従えば1590年には18歳になっていたはず）のマテューは、ペンを捨てて剣を取ったのだろう。マテュー

は結局、内乱終結まで王に仕えることになるが、内乱が終わったときは学業継続には年をとりすぎていたため、演劇の世界に入り、「悲劇・喜劇・田園劇・その他まじめなあるいは滑稽な作品」*quelques tragédies, comédies, pastorales et autres poèmes tant graves que facétieux* を書き、また自ら舞台に立つようにもなった、とのことである⁽⁷⁾。内乱つまりフランスの宗教戦争は、ふつう、ナントの勅令（1698年4月）をもって終結したとされる。彼が芝居の世界に足を踏み入れたのはこのころと考えてよいだろう。

マテュー・ルフューヴル、芸名ラ・ポルトは、俳優として演じる以前に、作家として戯曲を書いてもいたわけだが、彼の経歴、とくに武器を取って王に従うようになる以前は学業に励んでいたことを思えば、一定の教養も身につけていたと考えられる。以下、彼の役者としての経歴をたどってみることにしよう。

すでに見たように、マテューが芝居の世界に入ったのは、1598年頃のことと思われる。しかし、おそらくは学問的素養があったため、短期間で作家、さらには俳優としての力量を発揮するようになったに違いない。というのも、1600年には、ラ・ポルトはすでに座長として劇団を率いているからである。実際に、1600年3月22日⁽⁸⁾、アンジェで「王の俳優たち」*comédiens du roi* が劇団結成契約を結んでいるが⁽⁹⁾、この文書において彼の名は俳優たちの筆頭におかれている。一座を結成した役者たちは、

マテュー・ルフューヴル（芸名ラ・ポルト）

ジャック・ロビノー Jacques Robineau（芸名ラ・ブルトニエール La Bretonnière）

フルリー・ジャコー Fleury Jacquault⁽¹⁰⁾（芸名モンフルリー Monfleury）

クロード・ユソン Claude Husson（芸名ロングヴァル Longueval）

ダニエル・デュゲ Daniel Dugué（芸名ラ・シェネ La Chesnaie）

アレクサンドル・アルディ

の6人である。契約期間は1年で、その間、各地を巡り、「劇や物語」*comedies et histoires* を上演する。劇の上演あるいはその他のことで得られた収益は平等に分配する。収益の総額の7分の1は「喜劇、悲劇、田園劇、その他の劇を演じるのに適当な衣装のための費用」*l'entretien des habitz et accoustremens qu'il leur conviendra pour représenter leurs comedies tragedies pastorales et autres jeux* とし、残りは均等に分割し、各自が6分の1ずつ（これが「取り分1」*une part* となる）を受け取る、などということが記されている⁽¹¹⁾。

この契約書で真っ先に注目すべきはアレクサンドル・アルディの存在である。従来、アルディは1590年代終わりごろからヴァルラン・ル・コントと行動を共にしていたと考えられていたが、この文書によって、1600年3月にラ・ポルトの劇団に、それも作者 *poète* としてではなく、俳優 *comédien* として加わっていることが確認されたわけである⁽¹²⁾。アルディがいつごろラ・ポルトと出会ったのかは不明だが、戯曲作者としての経験をすでに持っていたラ・ポルトからアルディが何らかの影響を受けたかもしれないと思うと、この二人の出会いは意味深長である。

なお、劇団には複数名の「子供たち」*enfants*（俳優見習の少年・少女たち、それとも役者の子供

たち、あるいはその両方?) がいて、その食費や生活費は劇団全体の費用によってまかなわれる、とも書かれている。しかし、女優(少なくとも「取り分」partの配分にあずかる女優)の名前は一人も記されていない。実際に一人もいなかったのか、あるいは「子供たち」の中に女優の卵がいて、「取り分」はないが舞台には立っていたのか、そのあたりのことはわからない。ただ、契約文書に「喜劇、悲劇、田園劇、その他の劇を演じるのに適当な衣装のための費用」という文言があることから、悲劇や田園劇のように、女優が活躍する場面がありそうな、またそれだけに女優の存在が必要ともなる劇が、レパトリーに含まれていたに違いない。実際に、この時から2年半後にラ・ポルトはマリー・ヴェニエールと結婚するが、マリーはまもなく劇団の看板女優というだけではなく、17世紀初めを代表する女優となる。おそらくラ・ポルトは、すでにこの時期から、女優の存在の意義と必要性とを認識していただろう。

ところで、俳優たち全員が「王の俳優」と名乗っていることも、気になるところである。「王の俳優」という称号が実際にどれほどの経済的利益を役者たちにもたらしたかは明らかでない。しかし、1600年前後という時期においてこの称号を名乗っていたのは、国王に招かれてフランスを訪れたイタリア人劇団を別にして、フランス人俳優の中では当時もっとも有名な俳優・座長だったヴァルラン・ル・コントとその劇団の俳優たちにほとんど限られていた⁽¹³⁾。ラ・ポルトとその劇団の俳優たちは、1600年以前にヴァルランと関係を持っていたのだろうか。ヴァルランとの関係から「王の俳優」を名乗るようになったのだろうか。あるいはヴァルランとは関係なく、ラ・ポルト自身が国王からこの称号を名乗ることを許されたのだろうか。マテュー・ルフェーヴルが内乱のさなかにアンリ4世に仕えて戦っていたことを思えば、その可能性もありそうである。いずれにせよ、文書記録を見る限り、1600年前後の時期に—そしてその後も一貫して—「王の俳優」という肩書きを名乗っていた俳優はヴァルラン・ル・コントとラ・ポルトの二人、および彼らの劇団に属する(あるいは属していた)俳優たちに限られているようである⁽¹⁴⁾。

アンジェでの劇団契約から1年半後の1601年12月28日、ラ・ポルト劇団はパリのラングル館 Hôtel de Langres の屋内調馬場 manège を借りて、次の四旬節の初めまで jusqu'au début du prochain Carême⁽¹⁵⁾、劇を上演する契約を結んでいる⁽¹⁶⁾。契約に名を連ねていたのは、レオナルド・ダランブール Léonard Dalanbour (ou d'Alambourg)、ジャック・ロビノー、フルリー・ジャコー、クロード・ユソン、そしてマテュー・ルフェーヴルの5人で、調馬場はこの日の正午から俳優たちが使用できるとされ、賃貸借料は25 エキュ・ソレイユ écus soleil だった。ロビノー、ジャコー、ユソンの3人は、1600年アンジェ以来の(あるいはそれ以前からかもしれない)仲間たちである。デュゲとアルディの二人がどうしたかはわからない。1年の契約期間を終えた後、別の劇団に移って行ったのだろう。

実際に、俳優たちの離合集散は普通のことだった。1602年2月20日(灰の水曜日)に四旬節が始まり、パリでの上演が一段落した後、劇団はまたもや再編成されることになる。というのも、このとき一座に加わっていたロビノー、ジャコー、ダランブールの3人は、1603年8月19日にアンジェで新に劇団を結成するが、ラ・ポルトの名前はそこにはない⁽¹⁷⁾。この劇団はロビノーが座長で、2

人の女優 — クロード・ピトン Claude Piton とコロンプ・ヴニエール Colombe Venière — が加わっていることも特筆すべきだろう⁽¹⁸⁾。なお、コロンプ・ヴニエールは、ラ・ポルトの妻マリー・ヴニエールの姉妹であり、1603年アンジェの契約書にはフルリー・ジャコーの妻と記されている。さらに付け加えるなら、フルリーとコロンプは1606年2月9日にもアンジェで新に劇団を結成しているが⁽¹⁹⁾、以前の仲間たち — 1600年アンジェ、1601年パリ、1603年アンジェで同じ劇団に加わっていた俳優たち — は誰一人残っていなかった。

ラ・ポルトとはいえば、かつての仲間たちと分かれて別の劇団を結成し、地方を旅しながら演じていたのだろう。彼の劇団のことが再び記録にあらわれるのは1607年のことである。その間のラ・ポルトについて、ひとつははっきりしているのは、すでに述べたように、1602年12月19日にマリー・ヴニエールと結婚したということである⁽²⁰⁾。「結婚契約書」によれば、マテュー・ルフューヴルつまりラ・ポルトは、年齢30歳、身分はécuyer（王や貴族の侍臣）と記されている⁽²¹⁾。妻マリーは成年 majeure と記されているだけで、具体的な年齢は明らかではないが、25歳を越えていたと思われる⁽²²⁾。マリーの父はジャン・ヴニエール Jean Venière、母はペレット・ル・ヴァスール Perrette Le Vasseur、父はブルゴーニュ地方サンスのバイイ裁判区検事 procureur au bailliage de Sens である。しかるべき社会的地位といえるだろう。マテューの親の身分は「結婚契約書」にも、また先に紹介した「勅許状」にも明記されていないが、両親とも教育には熱心でマテューが幼い時から学問を身につけさせようとしたということであるから、やはりしかるべき社会的地位にあったと考えてよいだろう。

マリーはやがて女優として舞台に立ち、世間からも評価されるようになる⁽²³⁾。マテューとの結婚を決心したとき、おそらく自分も女優となろうと決めていたのだろう。マリーの親がこの結婚に賛成していたかどうかはわからない。しかし、結婚契約書が、マリーの実家があるサンスではなくパリで作成されていること、またマリーが成年（つまり自分の意志で契約をする権利もてる年齢）に達していることが明記されているところから推測すると、娘の結婚を喜んでいなかったかもしれない。

それから1606年までの間、マテュー・ルフューヴル（ラ・ポルト）とマリー・ヴニエール（芸名は当時の習慣からラ・ポルト嬢 mademoiselle La Porte となる）がどのように活動していたかを記した文書は見つかっていない。先に述べたように、1603年と1606年のアンジェの劇団契約には、フルリーとコロンプの名前はあるが、マテューもマリーも加わっていない。マテューとフルリーがそれぞれ別行動をとるようになった理由は明らかではないが、これから述べる事件が暗示するように、フルリーの性格がひとつの原因になっていたのかもしれない。というのも、1607年2月8日付けパリの文書⁽²⁴⁾から、フルリーがラ・ポルトと他の劇団員たちに対して衣装と荷物の差し押さえを訴え出ていることがわかる。この文書は、フルリーが差し押さえを撤回する代わりに、ラ・ポルトとフルリーの荷物をルーアン Rouen に運ぶ費用を共同で出すことを条件とする旨が記されている。ここから想像できるのは、次のようなことである。フルリーは再びラ・ポルトの劇団に加わろうとしていた。先に見たように、1606年2月9日にアンジェでフルリーは劇団を結成していたが、契約期間

はその日から1年間だった⁽²⁵⁾。1607年2月8日という日付はそれから1年後にあたるわけである。おそらくフルリーは、今度はラ・ポルトと組んで、一緒にルーアンに行く計画を立てていた（あるいはラ・ポルトの方からフルリーに話を持ちかけていたのかもしれない）。ところが、何らかの理由で— おそらくはフルリーの身勝手から⁽²⁶⁾— 諍いとなり、それが訴訟にまで発展したあげく、条件付きで和解が成立したことを文書が示しているわけである。ラ・ポルト劇団は予定通りルーアンに行き、演じたと思われる。和解の条件から考えれば、フルリー・ジャコーもおそらく一緒にルーアンに行ったのだろうが、ラ・ポルトとフルリーの関係は悪化したに違いない。その後の記録を見る限り、二人が組むことは二度となかった。

ラ・ポルトの劇団は、同じ1607年の9月にブルジュ Bourges で約1ヶ月にわたって上演している。その際、当地で学院を経営するイエズス会士が、劇を見に行くものはみな破門されると言って上演を妨害しようとしたため、ラ・ポルトは9月9日に、イエズス会士に反論する前口上 Prologue を舞台上で述べたことが、ピエール・ド・レトワル Pierre de L'Estoile の1607年10月2日付の日記に書かれている⁽²⁷⁾。友人から送られてきた前口上を見て、レトワルは「いかにも道化役者にふさわしい、ふざけた不出来な口上で、見るべきはその題目だけである」と手厳しい評価を下し、書き写す必要無しと断じている。しかし、翌年2月25日の日記では、友人から再び送られてきた前口上を読み、またそれが（前に送られてきたときにはそう思わなかったが）観客を前にして実際に書かれている通りに前口上して述べられたと知り、「粗雑なものではあるが、当代の注目すべきことのひとつ」として今回は書き写した、と記している⁽²⁸⁾。

ラ・ポルトの前口上のテキストは実際に残されていて、転写・刊行されてもいる⁽²⁹⁾。レトワルも言っているように「当代の注目すべきことのひとつ」であり、また教会（ここでは具体的にはイエズス会）と演劇・俳優との関係を知る上でも重要なテキストであるので、その内容を簡単に紹介することにしよう。

ラ・ポルトは、まず観客に向かって、好んで自分の無学をさらけ出すつもりはなかったのだが、敵から不当な中傷を浴びせられた以上、こうして自己防衛に努めざるを得ないわけで、そのことを皆様方はぜひ公平にご判断いただきたい、と訴えかける。彼らはわれわれ役者たちのことを魔術師とか魔法使いと言っているが、われわれは、どこぞの方々のように、呪いや魔術や護符でもって君主の命を縮めようなどと思ったことは一度としてない⁽³⁰⁾。もしも演劇や俳優が彼らの言うとおりのものなら、なぜ彼らは生徒にそれを教えるのか⁽³¹⁾。彼らの劇は金のためにするのではないというが、それならなぜ彼らが上演する悲劇を見に来る人々にたいそうな金額を要求するのか。その額はしばしば3～400エキュに上るのに、そうしてふんだくった金はまっとうなものだが、われわれが木戸でちょうどいする5ソルはそうではないというのだろうか。彼らは、劇よりも、また他のいかなることよりも、いかにそれが有益で必要なものであったとしても、まず神への奉仕を第一にせよと言う。だが、一日は12時間あり、それらの時間を分けて、神に祈るためにも、またなにかのまじめな娯楽のために使うこともできるだろう。それから、ラ・ポルトは、聖トマス・アクィナス『神学大全』のなかで演劇を好意的に評価している部分を実際に引用し、さらにはトマス以降の重要な神学

者たちの著作も列挙しつつ、演劇擁護論を展開する。そして、国王や君公、地方総督や司法行政官も演劇と俳優を認め評価して下さっていると続けながら、イエズス会士に真っ向から反撃し、彼らがなんとおもうと私はこの職業を続け、精進を重ね、観客の皆様にご満足いただくことを願っておりますので、どうぞご最良のほどよろしくお願い申し上げます、と締めくくっている。

以上がラ・ポルトの前口上のあらましである。古典劇の傑作と比べればいかにも荒削りなところが目立つテキストではあるが、17世紀の初めという時代を考え（フランス語が洗練されていくのはまだもう少し先のことである）、また当時を代表する劇作家アレクサンドル・アルディの文体とも比較してみる限り、レトワルがけなすほど不出来で粗雑なものとは思えない。ただし、ここで演劇擁護に利用された聖トマス・アクィナスやその他の神学者たちのテキストについては、ラ・ポルト自身の博識・研究の成果ではなく、当時の役者たちの間に共有されていた文書からの孫引きだった⁽³²⁾。

1607年9月のブルージュでの上演には、ラ・ポルトの妻マリーも加わっていた⁽³³⁾。また、ちょうど同じ時期、ヴァルラン・ル・コントの劇団もきており、両劇団はブルージュ滞在中は一緒に劇を演じていたようである⁽³⁴⁾。なお、ヴァルラン劇団にはアレクサンドル・アルディも俳優として加わっていた⁽³⁵⁾。

ヴァルラン劇団は、遅くとも9月10日前後にはブルージュを去ってパリに向かったはずである⁽³⁶⁾。というのも、8月6日に代理人を通じて、パリのオテル・ド・ブルゴーニュ座 Théâtre de l'Hôtel de Bourgogne を9月23日から翌年1608年の四旬節前日（1608年の灰の水曜日は2月20日なので2月19日）まで借りて上演する契約を、劇場所有者の受難劇協会 Confrérie de la Passion と結んでいたからである⁽³⁷⁾。そしてラ・ポルト劇団も、ブルージュでの上演を終えた後、おそらく9月末から10月初めにかけてパリに上り、オテル・ド・ブルゴーニュ座で、ヴァルラン劇団と共に一あるいは交互に一演じている。このことは、1607年10月8日、ラ・ポルトがパリの2人の果物商人と、オテル・ド・ブルゴーニュ座で彼の劇団とヴァルラン・ル・コントの劇団が上演する際、劇場内で果物を売る許可を与える契約を結んでいることから確認できる⁽³⁸⁾。契約期間は翌年の四旬節前日まで、果物を売るときは大声をあげたりせず控え目にする、60リーヴル支払うこと、そのうち3分の1を諸聖人の日（11月1日）に、3分の1を12月1日に、残る3分の1を1月1日に支払うことを条件とする、というものだ⁽³⁹⁾。この約3ヶ月間、ラ・ポルトは、ヴァルランと共にオテル・ド・ブルゴーニュ座で演じたわけである⁽⁴⁰⁾。ただし、両劇団は、合併したのではなく、互いの独立性を維持しながら演じていたようである⁽⁴¹⁾。それぞれの劇団が交互に演じたか、あるいは合同で演じたかはさだかではないが。

1608年2月21日（灰の水曜日の翌日）、ヴァルラン劇団との共同上演が終わった後、ラ・ポルトはパリで新たに劇団を結成し直している⁽⁴²⁾。契約期間は2年で、このときの劇団契約にはマリーも名をつらね、署名もしている。取り分は夫と二人あわせて2と3分の2で、これは彼女がすでに女優として重きをなしていることを示唆するものである。このほか劇団に加わっているのは、フランソワ・ル・ヴォートル François Le Vautrel、その兄弟のオーブリー Aubry とクロード Claude、ジャック・モージャン Jacques Maugin、マテュー・リュベ Mathieu Rubé、ロベール・ゲラン Robert

Guérin である⁽⁴³⁾。

その後、ラ・ポルト劇団は、1609年8月1日から31日までの1ヶ月間、再びオテル・ド・ブルゴーニュ座で演じている⁽⁴⁴⁾。この契約は、ラ・ポルトと共にロベール・ゲランが劇団を代表して7月18日に署名しているが、7月20日には劇場使用料210リーヴルのうち150リーヴルが支払われ、8月12日には残りの60リーヴルが支払われている。上演は成功したのだろう。なお、オテル・ド・ブルゴーニュ座での上演が終わる直前の8月29日、ラ・ポルトと妻マリー、そしてマリーの兄弟ピエールが、内装職人ジョルジュ・ビュフカン Geroges Buffequin⁽⁴⁵⁾と、「互いに侮辱しあったこと」*offenses échangées* による訴訟について和解する文書を作成している⁽⁴⁶⁾。ラ・ポルトとビュフカンのあいだに一体何があったのかはこれだけではわからないが、ラ・ポルトがこのとき妻のマリーとその兄弟ピエールと行動を共にしていたことは確認できる。

1609年9月、ラ・ポルトはオテル・ド・ブルゴーニュ座をヴァルラン劇団にゆずったあと⁽⁴⁷⁾、地方に出発する準備にかかったようである。1609年9月9日、ラ・ポルトはパリに住む2人の楽士と、地方での上演に同行する旨の契約を結んでいるからである⁽⁴⁸⁾。だがその前の9月3日に、ラ・ポルトと妻マリーは1602年12月19日の結婚契約を確認すると共に、互いに全財産を贈与しあうことを記していなかったのでその旨を追記する文書を作成している⁽⁴⁹⁾。これが一体何を意味するのか、二人の意図は何だったのか、文書から読み取ることはできない。

ところでラ・ポルトはいつ旅に出たのだろうか。早くても9月10日以降であることは間違いない。しかし、この旅は短かったはずである。というのも、遅くとも1609年11月初めまでには、ラ・ポルト劇団はパリのアルジャン館 Hôtel d'Argent で上演を始めているからである。そのことは、オテル・ド・ブルゴーニュ座に関連する二つの文書から確認することができる⁽⁵⁰⁾。

第一の文書によれば⁽⁵¹⁾、1610年3月13日に、オテル・ド・ブルゴーニュ座の所有者でパリとその近郊における劇上演独占権を有する受難劇協会と、ラ・ポルトおよび妻マリー・ヴニエールと劇団俳優たちとの間で争われていた訴訟に対して、パリのシャトレ裁判所 Châtelet の判決が下されている。判決では、「当時アルジャン館と称する場所で演じていた上記俳優たち [ラ・ポルトたち] に対し上記アルジャン館にて彼らがすでに演じていた、また演じるであろう日について一日あたり60ソル sols を原告側 [受難劇協会] に支払うことを命じ、かつこの判決は今後当パリ市において演じるであろう他のすべての俳優たちに対しても適用される旨宣告」されている。ここで言われている「当時」というのがいつのことか正確にはわからないが、第二の文書によると⁽⁵²⁾、被告側つまりラ・ポルトたちにたいするシャトレからの召喚状が1609年11月6日に出されていることがわかる。つまり、ラ・ポルト劇団はそれ以前にすでにアルジャン館で演じ始めていたということである。この上演がいつ始まりいつまで続いたかはわからない。しかし、1609年9月からオテル・ド・ブルゴーニュ座で演じていたヴァルラン・ル・コント劇団と競争する形になったことは間違いないだろう⁽⁵³⁾。

1610年1月28日パリで、ラ・ポルトはヴァルランとともに演じる契約を結んでいる⁽⁵⁴⁾。契約期間は次の四旬節初め *carême entrant* (1610年の灰の水曜日は2月24日) から3年間で、ラ・ポルトは妻マリーの、ヴァルランはピエール・ル・メシエ Pierre Le Messier⁽⁵⁵⁾のそれぞれ代理人として、この

二人に代わって契約する旨も記されている。取り分 part はヴァルランとピエールが二人で2、ラ・ポルト夫妻が二人で2と3分の2とされている。契約期間中、ヴァルランとラ・ポルトは、パリあるいはその他の場所で「田園劇、悲劇、悲喜劇、その他の劇」pastorales, tragedies, tragecomedies et autres jeux を演じること、衣装は演じる劇にあわせてそれぞれが用意すること、座員を加入させるに当たっては両者の合意が必要であること、また劇団を脱退する際にはツール貨600リーヴルを支払うべきこと、ピエール・ル・メシエの妹で現在ヴァルランのもとで女優修行を積んでいるジュディット・ル・メシエ Judith Le Messier⁽⁵⁹⁾が今から1年以内に舞台に立って演じることができるようになったときには、そのできばえに応じてヴァルランとラ・ポルトが適当と見なした金額を支払うことなどが決められている。

ヴァルランとラ・ポルトは、そのすぐ後、2月3日から受難の主日（4月4日）までの間、オテル・ド・ブルゴーニュ座で上演することを受難劇協会と契約している⁽⁵⁷⁾。さらに3月29日、ヴァルラン・ル・コントは、この日から2年間、劇団を結成する契約を改めて結んでいる⁽⁵⁸⁾。このとき契約に加わっている俳優たちは次の通りである。

ヴァルラン・ル・コント

（サヴィニアン・ボニー Savinien Bony—ヴァルランが代理人として契約）

マリー・ヴニエール

（ラ・ポルト—妻マリー・ヴニエールが代理人として契約）

フランソワ・ル・ヴォートレル

エティエンヌ・ド・リュファン Étienne de Ruffin

ユーグ・ケリュ Hugues Quéru⁽⁵⁹⁾

ロベール・ゲラン

（ルイ・ニシエ Louis Nicyer—ル・ヴォートレルとゲランの二人が代理人として契約）

つまり、契約の場に赴き署名もしている俳優が6名、代理人を通じて加わっている俳優が3名、それに契約には名を連ねていないがヴァルランと共に演じるはずのピエール・ル・メシエを加えて、合計10名である⁽⁶⁰⁾。各自の取り分だが、ヴァルランとピエールの二人合わせて2、ラ・ポルトと妻マリーの二人で2と2/3、ル・ヴォートレルは1と1/4、ド・リュファン、ケリュ、ゲランはそれぞれ1、ニシエは2/3とされている。そのほか、衣装は各自が用意すること、時間には遅れぬこと、遅れた場合はその日の取り分がもらえぬこと、病気した場合も健康なときと同様に取り分にあずかれること、全員の合意がない限り劇団から脱退できないこと、同意無しに脱退する場合はツール貨300リーヴルを支払うべきことなどが定められている。

当日この契約に参加していなかった俳優たちだが、ルイ・ニシエは4月3日に、サヴィニアン・ボニーは4月8日に、それぞれ契約を確認し承した旨が契約文書の余白に追記され、あわせて本人と公証人の署名が添えられている。しかし、ラ・ポルトが契約を承認したのは6月10日のことである（余白にその旨が追記されラ・ポルト自身も署名している）。ラ・ポルトがなぜ3月29日の契約に直接加わらなかったのか、さらに契約承認が約2ヶ月半後と大幅に遅れた理由は何か、文書か

ら知ることはできない。なお、6月10日の追記事項には、ラ・ポルトの承認だけでなく、俳優ニコラ・ガトー Nicolas Gasteau と女優ラシェル・トレポー Rachel Trépeau⁽⁶¹⁾が劇団に加入する旨も記されているが、このときはガトーがラシエルの代理人として彼女の代わりに署名している（ラシエルが契約を確認した承したのは9月4日のことで、余白に追記・署名あり）。

時間を少し逆戻りさせることになるが、3月29日の契約の10日余り前、3月17日に、ラ・ポルトとヴァルランは、シャテルロー Châtelleraut の住人で今はパリにきている運送屋と契約している⁽⁶²⁾。次の聖レミの日（10月1日⁽⁶³⁾）までを限度に *jusques au jour de Saint Remy prochain seulement*、ラ・ポルトとヴァルランが近々計画している旅行のあいだ、二人が望む場所に衣装箱と荷物 *les coffres hardes et bagages* を荷車に積んで運ぶこと、運送代は20里 *lieues*（1里は約4キロメートル）ごとにトゥール貨30リーヴルとすること、馬の餌代は運送屋が負担することなどが決められている。

すでに見たように、ヴァルランとラ・ポルトは、2月3日から受難の主日（4月4日）までの間、オテル・ド・ブルゴーニュ座を使う契約をしている。その後は地方に出る計画を立て、ちょうどそのころパリに滞在していた運送屋と契約を結んだのだろう。しかし、ヴァルランは4月22日にふたたび受難劇協会と、その日から15日間 *quinze jours*（つまり5月6日まで）、オテル・ド・ブルゴーニュ座を借りる契約をしている。さらにヴァルランは、7月19日に、ラ・ポルト、ロベール・ゲラン、ユグ・ケリュ、ジャン・デュメヌヌ Jean Dumayne、ルイ・ニシエ、エティエンヌ・ド・リュファンたちを代表して、この日から翌年の謝肉の火曜日（1611年2月15日）まで、オテル・ド・ブルゴーニュ座で演じることにし、受難劇協会と契約する⁽⁶⁴⁾。

こう見てくると、ヴァルランとラ・ポルトが運送屋との契約をいつ実行したか、その時期が限定されてくる。改めて日付を見直してみよう。運送屋との契約は3月17日だが、3月29日にヴァルランはパリで劇団結成の契約を結んでいるし、ルイ・ニシエは4月3日に、サヴィニアン・ボニーは4月8日に、それぞれパリの公証人のもとで契約を確認している。ラ・ポルトが契約を承認したのは6月10日のことである。そして7月19日には、ヴァルランはパリで受難劇協会との契約に署名している（その日から翌年2月15日までヴァルランとラ・ポルトの劇団はオテル・ド・ブルゴーニュ座で上演することになる）。とすると、ヴァルランたちがパリを離れることができた時期は、4月9日から6月9日までの2ヶ月間、そして、6月11日から7月18日までの約1ヶ月間のいずれか、あるいはその両方ということになるだろう⁽⁶⁵⁾。

いずれにせよ、ヴァルランとラ・ポルトの劇団は、1610年7月19日から、再びパリのオテル・ド・ブルゴーニュ座で演じるようになった。それから3週間後の8月9日、ラ・ポルトは楽器造り夫婦に、次の復活祭までには返済するとの条件で、600リーヴルを貸している⁽⁶⁶⁾。なお、この文書ではマテュー・ルフューヴル（ラ・ポルト）は *« noble homme »*（文字通り訳せば「貴人」あるいは「貴紳」）と記されている。マテュー・ルフューヴルに関わる文書を見る限り、彼は市民階級の出身のようである。だからこの *« noble homme »* という言葉は、リトレの辞典にも記されているように、貴族だけでなく市民も契約文書などで用いた肩書きと理解すべきだろう⁽⁶⁷⁾。

それから約4ヶ月後の12月5日、ラ・ポルトはパリ市民マテュー・ド・ロジェ Mathieu de Roger

との事件に決着をつけている⁽⁶⁸⁾。二人は「喧嘩沙汰」*bagarre*をおこし、双方が負傷したが、費用（おそらくは傷の手当に要した費用）を互いに免除しあうことで和解が成立したようである。

その8日後の1610年12月13日に、ラ・ポルトは妻のマリーとともに、劇団を脱退する⁽⁶⁹⁾。ヴァージニア・スコットは、マテュー・ド・ロジェとの喧嘩沙汰による負傷が原因となったのではないかと指摘しているが⁽⁷⁰⁾、その可能性は確かにある。12月13日の文書には、劇団員の合意により、オテル・ド・ブルゴーニュ座の賃貸借料のうちラ・ポルトとマリーが負担すべきとされていた300リーヴルを免除する旨が記されている。また、すでに見たように、3月29日の劇団結成契約では、全員の合意がない限り劇団から脱退できないこと、同意無しに脱退する場合は罰金としてトゥール貨300リーヴルが課させることなどが定められていたが、ラ・ポルト夫妻に罰金が求められたわけでもない。これは、同じ日に劇団を脱退したニコラ・ガトーがそのために90リーヴル支払っているのとは対照的である⁽⁷¹⁾。スコットが指摘するように、ラ・ポルトはおそらくは負傷が原因で舞台に立つことができなくなったため引退を余儀なくされた、そしてこれは、劇団員全員がやむなしと認めることとなった—そう考えれば、ラ・ポルトの突然の引退の理由も納得できるだろう。

突然の引退といったが、実際にラ・ポルト夫妻は芝居の世界から引退し、マリーの実家があるサンスに行って暮らすようになった⁽⁷²⁾。1610年12月以前の記録を見る限り、ラ・ポルトが引退するような兆候は全く感じられない。それだけに、負傷が引退の原因となった可能性は高いと言えそうである。ラ・ポルトは、芝居の世界に入る前は、アンリ4世国王のもとで軍務についていた。戦国の気風が強く残っていた時代である。マテュー・ド・ロジェとの喧嘩沙汰では、双方が剣を交えて戦ったとしても不思議ではない。双方が負傷したわけだが、ラ・ポルトが受けた傷は—相互に費用を免除しあうことで和解が成立したいきさつを考えればおそらく相手側の傷も—かなり深かったのかもしれない。

引退後のマテュー・ルフエーヴル（以後は本名を使うことにしよう）とマリーは、芝居とはおそらく無縁の生活を送ったと思われる。1619年に、マテューは、俳優としての過去を清算するため「名誉回復」を王に願い出て、認められている⁽⁷³⁾。俳優に対する社会一般の評価は決して芳しくはなかったので、普通の市民として静かに—また名誉を傷つけられずに—暮らすには、国王による「勅許状」が必要と考えたのだろう。

その後の彼の人生は平穏無事であっただろうか。ひとつ気になるのは、1622年12月6日にサンスのバイイ裁判区が、マテューとマリーの財産分離を宣告していることである⁽⁷⁴⁾。さらに1624年6月27日には、マテューは「どこか離れた場所に隠棲し余生を送ること」を望み、全財産を妻マリーに贈与したうえで、マリーから終身年金として年額150リーヴルを受け取るという取り決めをしている⁽⁷⁵⁾。二人の間に何があったのかはわからない。しかし、二人が円満な夫婦関係を維持し平穏無事な生活を送っていたとは言い難いように思える。その後しばらくしてマテューが死ぬと、マリーはパリ高等法院の弁護士ジャン・レモン *Jean Rémond* と再婚した⁽⁷⁶⁾。

注

- (1) ジャン・ド・ゴーフルトー『ボルドー年代記』には、「En cette année [en 1592], Valeran, un insigne comediant françois, vint à Bourdeau, e y representa beaucoup de tragedies et farces, avec ung très grand applaudissement des spectateurs.」 「この年 [1592年]、著名なフランス人俳優ヴァルランがボルドーを訪れ、悲劇や笑劇を数多く演じて観客からもてはやされた」と記されている。Jean de Gaufreteau, *Chronique bordelaise*, Tome premier (1240 à 1599), Bordeaux, 1877, p. 306.
- (2) *Contrat de mariage entre Mathieu Lefebvre et Marie Venière (Analyse)*, Alan Howe, *Le Théâtre professionnel à Paris, 1600-1649 : documents du Minutier central des notaires de Paris*, Paris, Centre historique des Archives nationales, 2000, p.214 ; S. Wilma Deierkauf-Holsboer, *Le Théâtre de l'Hôtel de Bourgogne*, Tome I, Paris, Nizet, 1968, p. 179.
- (3) *Lettres patentes de Louis XIII portant réhabilitation pour Mathieu Lefebvre*, Emile Campardon, *Les Comédiens du roi de la troupe française pendant les deux derniers siècles*, Paris, Champion, 1879, p. 281-282.
- (4) 1602年12月19日付の「結婚契約書」によれば、マテューの年齢は30歳と記されている。つまり1572年生まれということである。しかし、1619年の「勅許状」では、「1590年、16歳のときに」従軍したとあり、これによれば1574年ごろの生まれとなる。
- (5) 「勅許状」には、「ses père et mère, l'auroient dès son bas aage destiné à l'estude des bonnes lectres où de faict ils l'auroient faict instruire...」 「彼の父母は、彼が幼いときから学問の道に進ませようとし、また実際に教育を受けさせた…」と記されている。
- (6) 「勅許状」参照。
- (7) 同前。
- (8) 1600年3月22日は四旬節第5主日後の水曜日にあたる。次の3月26日の日曜（受難の主日）から始まる聖週間を経て、4月2日の日曜が復活の主日となる。なお、復活祭に応じて毎年日付が変わる移動祝祭日については、Pierre de L'Estoile, *Mémoires-Journaux 1574-1611*, Reproduction intégrale de l'édition Jouaste et Lemerre complétée des inédits découverts ultérieurement. Avec de nombreuses illustrations. 12 vols., Paris, Tallandier, 1982を参照した（以下同様）。
- (9) *Acte d'association des comédiens du roi du 22 mars 1600 à Angers*, 戸口民也「アンジェの3つの文書 — 17世紀初頭の劇団協約」（17世紀仏演劇研究会『エイコス』第16号、2004年、p. 121-133、契約文書のテキストは同p. 128-129）。
- (10) フルリー・ジャコー Fleury Jacquault の姓を、ほとんどすべての研究者はJacobとしているが、本人は常にJacquaultと署名しているので、その署名に従うことにする。
- (11) 契約の詳細については、戸口「アンジェの3つの文書」参照。
- (12) この契約書はアレクサンドル・アルデイに関する最も古い文書でもある。アルデイに関わる事柄については、戸口民也「Alexandre Hardy, comédien — 1600年アンジェの古文書が語るこ

と」(九州フランス文学会『フランス文学論集』第34号、1999年、p. 15-25)を参照されたい。

- (13) ヴァルラン・ル・コントとその劇団員はすでに1598年3月16日の文書で「王の俳優」comédiens du roiと名乗っている。Deierkauf-Holsboer, *Le Théâtre de l'Hôtel de Bourgogne*, I, p. 170-173 ; *Vie d'Alexandre Hardy, poète du roi, 1572-1632 : 47 documents inédits*, Paris, Nizet, 1972, p. 171-174. その後も、ヴァルランとその劇団員は一貫して comédiens du roi, comédiens ordinaires du roi,あるいは comédiens français ordinaires du roi などと名乗っている。

- (14) 1600年アンジェでラ・ポルト劇団に加わっていたジャック・ロビノー、フルリー・ジャコー、ダニエル・デュゲの3人が、1603年8月19日アンジェで劇団契約を結んだ文書が残されているが、このときも俳優たちは「王の俳優」comédiens ordinaires du roiと称している。フルリー・ジャコーは1606年2月9日にもアンジェで、ロベール・ゲラン Robert Guérin (笑劇役者グロ＝ギヨーム Gros-Guillaumeとして有名)、ニコラ・ガトー Nicolas Gasteauなどと劇団契約を結んでいる。このときも俳優たち全員が「王の俳優」comédiens ordinaires du roiと名乗っていた(戸口「アンジェの3つの文書」参照)。なお、ロベール・ゲランが「王の俳優」の一人となったのは、現在確認されている文書の中では、これが最も古いものとなる。ゲランに関する最も古い記録は1598年にさかのぼるが、1606年のアンジェの文書以前は、ゲランおよび彼の劇団の他の俳優たちは、単に「俳優」comédiensあるいは「フランス人俳優」comédiens françaisとだけ記されていた(Deierkauf-Holsboer, *Vie d'Alexandre Hardy*, p. 175-178 et 182-183 ; *Le Théâtre de l'Hôtel de Bourgogne*, I, p. 177-178 ; Howe, *op. cit.*, p. 207, 208, 211, 212 et 343-346)。

1610年代、ラ・ポルトが引退しヴァルラン・ル・コントもパリ定着を断念した後、ロベール・ゲランとフランソワ・ル・~~ヴァートレル~~^{ヴォートレル} François Le Vautrel が「王の俳優劇団」Troupe des comédiens du roiを率いることになるが(この劇団が後に「オテル・ド・ブルゴーニュ座王立劇団」Troupe royale de l'Hôtel de Bourgogneとなる)、ル・~~ヴァートレル~~^{ヴォートレル}は1607年にヴァルラン劇団に加わっており(Howe, *op. cit.*, p. 224)、また1608年にはゲランと~~ヴァートレル~~^{ル・ヴォートレル}の二人はラ・ポルト劇団に加わる(Deierkauf-Holsboer, *Vie d'Alexandre Hardy*, p. 191-193)。そしてさらに1610年、二人はヴァルランとラ・ポルトの劇団に加わっている(Deierkauf-Holsboer, *Le Théâtre de l'Hôtel de Bourgogne*, I, p. 188-191 ; *Vie d'Alexandre Hardy*, p. 198-201 ; Howe, *op. cit.*, p. 236)。

こうしてみると、「王の俳優」という称号は、ヴァルランやラ・ポルトなど幾人かの特定の俳優、および彼らの劇団に加わった俳優たちが用いていたと見ることができるだろう。

- (15) 1602年は2月20日が灰の水曜日だった。つまり、その前日の2月19日までこの場所で演じる計画だったと考えてよい。
- (16) Howe, *op. cit.*, p. 14-16 et 212.
- (17) 戸口「アンジェの3つの文書」参照。
- (18) この2人の女優については、戸口「アンジェの3つの文書」のほか、戸口民也「フランス最初の女優たち」(国際シンポジウム「16～18世紀演劇の諸問題」、主催：早稲田大学演劇博物館

カタカナ表記の間違いを訂正します。入力ミスに気づかぬまま、校正でも見落としていました。2012.5.31.戸口

グローバル COE 日本劇研究コース・西洋演劇研究コース、日時：2011年11月25日～27日、会場：早稲田キャンパス大隈記念講堂小講堂において発表）も参照。発表原稿と配付資料は戸口ホームページの以下のアドレスに掲載している。

http://www.nagasaki-gaigo.ac.jp/toguchi/works/tog_ronbun/premieres-actrices.pdf

- (19) 戸口「アンジェの3つの文書」参照。
- (20) 「結婚契約書」参照。
- (21) 1609年8月29日の文書では、マテュー・ルフェーヴルは *valet de chambre du prince de Condé* コンデ大公の近習・従者）と記されている。Howe, *op. cit.*, p. 231-232.
- (22) 成年と認められる年齢は地方によって異なっていた。『アカデミー・フランセーズ辞典』*Dictionnaire de l'Académie française* 第1版（1694年）によれば、ノルマンディー地方では20歳だったが、パリでは25歳だった。結婚契約書はパリで作成されているので、このときのマリーの年齢は25歳以上と思われる。
- (23) マリー・ヴニエールとその姉妹コロンブ・ヴニエールについては、戸口「フランス最初の女優たち」を参照されたい。
- (24) Howe, *op. cit.*, p. 53 et 223.
- (25) 戸口「アンジェの3つの文書」参照。
- (26) フルリーはその後も、1611年から1612年にかけて、トゥールーズ Toulouse で仲間の劇団員たちを — それも事実無根の理由をかかげて一方的に — 訴えたりしている。この訴訟の経緯については、*Lettres de rémission accordées par Louis XIII à cinq de ses comédiens condamnés au bannissement par le parlement de Toulouse*, Campardon, *op.cit.*, p. 279-280 ; Deierkauf-holsboer, *Le Théâtre de l'Hôtel de Bourgogne*, I, p. 91-94 ; Howe, *op. cit.*, p. 56-63 および戸口「フランス最初の女優たち」を参照。
- (27) Pierre de L'Estoile, *Mémoires-Journaux 1574-1611*, Tome VIII, p. 348. なお、ラ・ポルトの前口上とその背景については、Michaël Desprez, « Un témoignage de la première querelle du théâtre en France — *Le Prologue de La Porte, comédien à Bourges, contre les Jésuites* (9 septembre 1607) — », *Études de Langue et de Littérature Françaises* (『フランス語フランス文学研究』), Société de Langue et de Littérature Françaises (日本フランス語フランス文学会), N° 95, septembre 2009, p. 45-59 も参照のこと。
- (28) L'Estoile, *op. cit.*, Tome IX, p. 50.
- (29) Hippolyte Boyer, *L'Ancien théâtre à Bourges — Le théâtre du collège*, Bourges, Imprimerie et lithographie Hippolyte Sire, 1982, p. 14-20.
- (30) 1594年に国王アンリ4世暗殺を企てたジャン・シャテル Jean Châtel がかつてイエズス会の学院で学んでいたことから、イエズス会士が国王暗殺をそそのかしたとされた事件をほのめかしていると思われる。
- (31) イエズス会の学院では劇を教育の柱のひとつとして生徒に教え、演じさせていた。ただし、

宗教や道徳に反するような台詞や筋立てを避けるため、台本は教師が教育的な配慮のもとに書いたものを使っていた。

- (32) Desprez, *op. cit.*, p. 56-59.
- (33) *Ibid.*, p. 49.
- (34) *Ibid.*
- (35) *Ibid.*
- (36) プールジュからパリまで、直線距離でも 200 キロメートル余りある。俳優たちには衣装や道具などの荷物がついてまわるし、全員が馬や馬車に乗って旅していたわけでもないだろうから、1日に移動できる距離は 20 から 25 キロメートル程度だったのではないか。9月23日にパリでの上演を始めようとしたら、旅には少なくとも 10 日ぐらいの日数を見しておく必要があっただろう。なお、ヴァルランは9月22日にパリの内装職人と、翌日からオテル・ド・ブルゴーニュ座で上演する劇のための舞台装置（書き割りと思われる）を注文する契約をしているので、この日以前にパリに着いていたことは間違いない。Cf. Deierkauf-Holsboer, *Vie d'Alexandre Hardy*, p. 189-190.
- (37) J. Fransen, « Documents inédits sur l'Hôtel de Bourgogne », *Revue d'histoire littéraire de la France*, juillet-sept. 1927, p. 321-355, voir p. 330-331 ; Howe, *op. cit.*, p. 43 et 224.
- (38) Howe, *op. cit.*, p. 43-45 et 225.
- (39) *Ibid.*
- (40) ラ・ポルトとヴァルランがオテル・ド・ブルゴーニュ座で共に演じていたことは、1607年10月24日付の、受難劇協会の新旧協会員の間で交わされた文書からも確認できる。Fransen, *op. cit.*, p. 330-331 ; Deierkauf-Holsboer, *Le Théâtre de l'Hôtel de Bourgogne*, I, p. 66-70 et 183-185 ; Howe, *op. cit.*, p. 43-45 et 225. なお、Deierkauf-Holsboer は、ヴァルランとラ・ポルトの提携が翌年の四旬節まで続いたかどうか、また上演が途中で打ち切られたのではないかとの疑問を呈し、その原因はアルディ作品が不評だったため、それがヴァルラン劇団の解体を引き起こしたにちがいないと結論している。しかし、ラ・ポルトと果物商人との契約は、むしろ上演が成功していたことを裏付けるものだという Howe の反論の方が妥当であると私には思われる。
- (41) Howe, *op. cit.*, p. 43-45.
- (42) Deierkauf-Holsboer, *Vie d'Alexandre Hardy*, p. 191-193 ; Howe, *op. cit.*, p. 43-45 et 226. なお、ヴァルラン・ル・コンドも 1607年12月1日に劇団を結成し直しているが、契約期間は 1608年四旬節第1主日（1608年2月24日）から 1609年四旬節中日 mi-carême（四旬節の第3主日後の木曜日；1609年3月26日）までとなっている。つまり、ラ・ポルト劇団もヴァルラン劇団も、1608年四旬節前日までオテル・ド・ブルゴーニュ座を共同で使い、その後はそれぞれ劇団を結成し直して新たに計画を立てたということである。1607年12月1日のヴァルラン劇団結成に関わる文書については、Deierkauf-Holsboer, *Le Théâtre de l'Hôtel de Bourgogne*, I, p. 185-186 ;

- Howe, *op. cit.*, p. 226 参照。
- (43) フランソワ・ル・ヴォートルとロベール・ゲランの二人は、1610年12月にラ・ポルトが引退し、1612年にはヴァルラン・ル・コントがパリを去った後、「王の俳優劇団」*Troupe des comédiens du roi* を率いて活躍する。やがてこの劇団は、1629年に、国王ルイ13世の命により、「王立劇団」*Troupe royale* としてオテル・ド・ブルゴーニュ座に定着することになる。ル・ヴォートルとゲランについては注14も参照されたい。
- (44) Howe, *op. cit.*, p. 231.
- (45) ジョルジュ・ビュフカンは、オテル・ド・ブルゴーニュ座の舞台装置家として知られているが、俳優・座長でもあったことは1608年12月24日の文書から知ることができる。Howe, *op. cit.*, p. 51-52 et 229.
- (46) Howe, *op. cit.*, p. 51-52 et 231-232.
- (47) 1609年7月18日の契約には、次に劇場を使用するヴァルラン劇団のために、9月1日には劇場をきれいに明け渡すべきことが記されている。Howe, *op. cit.*, p. 231.
- (48) Howe, *op. cit.*, p. 231.
- (49) *Ibid.*
- (50) 二つの文書のうちのひとつは *Inventaire des titres et papiers de l'Hôtel de Bourgogne* (Eudore Soulié, *Recherches sur Molière et sur sa famille*, Paris, Hachette, 1863, p. 151-165)、もうひとつは *Inventaire des pièces relatives à l'Hôtel de Bourgogne* (戸口民也「17世紀フランス演劇史研究ノート — 1598年パリ：古文書の読み違いをめぐって」、17世紀仏演劇研究会『エイコス』第6号、1990年、p. 67-77、*Inventaire* のテキストは「補遺」として p. 72-74 に全文掲載) である。
- (51) Soulié, *op. cit.*, p. 155.
- (52) 戸口「17世紀フランス演劇史研究ノート — 1598年パリ：古文書の読み違いをめぐって」p. 72-74。なお、Deierkauf-Holsboer, *Le Théâtre de l'Hôtel de Bourgogne*, I, p. 175にもこの *Inventaire* の一部が抜粋掲載されているが、日付が「17 mars 1598 et 28 avril 1599」[1598年3月17日と1599年4月28日]とされていることについてはいささか言及する必要がある。というのも、この二つの日付は、Deierkauf-Holsboer が抜粋掲載しているテキストがいつの事件であることを示しているにすぎず、*Inventaire* 全体は、Soulié, *Recherches sur Molière et sur sa famille*, p. 155 に取り上げられている1610年3月13日付のシャトレ判決（つまり1609年11月に始まった受難劇協会とラ・ポルト劇団とのあいだの訴訟事件に対する判決）に関連する文書の目録だからである。念のために付け加えれば、Deierkauf-Holsboer が抜粋掲載したテキストは、1610年3月13日付の判決の根拠となる過去の判例を示したものである。
- (53) ヴァルラン劇団は、1609年9月1日から翌年の謝肉の火曜日 *mardi gras* (灰の水曜日の前日で謝肉祭 *carnaval* の最終日；なお16010年の謝肉の火曜日は2月23日) までオテル・ド・ブルゴーニュ座を借りる契約を1609年4月7日に結んでいた。Howe, *op. cit.*, p. 230.
- (54) Deierkauf-Holsboer, *Vie d'Alexandre Hardy*, p. 195-197.

- (55) ピエール・ル・メシエは1609年4月にヴァルランのもとに弟子入りして俳優修業をはじめたばかりの若手俳優だが、後にベルローズ Bellerose の芸名で、オテル・ド・ブルゴーニュ王立劇団の看板俳優・座長として活躍することになる。なお、Deierkauf-Holsboer が転記した契約文書では Pierre Messier と記されている。
- (56) Deierkauf-Holsboer が転記した契約文書では Judicq Messier と記されている。
- (57) Howe, *op. cit.*, p. 235.
- (58) Deierkauf-Holsboer, *Vie d'Alexandre Hardy*, p.198-201.
- (59) 笑劇役者ゴートイエ＝ガルギーユ Gaultier-Garguille として有名。なお彼の姓はこれまで一般にゲリュ Guéru と記されることが多かったが、Quéru とするのが正しいようである。Howe, *op. cit.*, note 5 de la page 41.
- (60) 1610年1月28日の契約ではピエール・ル・メシエの妹ジュディットについて言及されていた。今回の契約にはジュディットの名前はないものの、女優見習いとして兄と共に劇団に参加していたに違いない。
- (61) ラシエルとニコラについては、戸口「フランス最初の女優たち」を参照されたい。
- (62) Deierkauf-Holsboer, *Vie d'Alexandre Hardy*, p.197-198.
- (63) ただし、現在のフランス・カトリック教会暦では、聖レミの記念日は1月15日となっている。
- (64) Howe, *op. cit.*, p. 237. この契約文書には、マリー・ヴニエール、フランソワ・ル・ヴォートル、それに6月10日に加わったニコラ・ガトーとラシエル・トレポーの名は記されていないが、1610年12月13日の文書（これについては後で取り上げる）から、彼らが劇団に加わっていたことは間違いないと思われる。それとは逆に、あらたに名前が記されたジャン・デュメヌは12月13日の文書には登場しない。しかし、1612年8月4日の文書（Howe, *op. cit.*, p. 246-247）で、デュメヌは再び、ゲラン、ル・ヴォートル、ド・リュファン、ケリュ、ニシエらの劇団に加わっていることが確認されている。なお、この劇団にはマリー・ヴニエールの姉妹コロンプも加わっていた。
- (65) ただし、3月29日の契約後すぐに、ニシエとボニーをパリに残したまま、劇団が地方に出発した可能性がないとは言えない。また6月10日にラ・ポルトがパリで契約の確認をしているが、このときはラ・ポルト一人だけが（あるいは妻のマリーも共に）パリにいて、他の俳優たちは地方をめぐるということも考えられなくはない。
- (66) Deierkauf-Holsboer, *Vie d'Alexandre Hardy*, p.202 ; Howe, *op. cit.*, p. 238.
- (67) リトレ『フランス語辞典』Émile Littré, *Dictionnaire de la langue française* には « Noble homme, qualité que prenaient quelquefois, non-seulement ceux qui étaient nobles, mais aussi quelques bourgeois, dans les actes qu'ils passaient. » 「Noble homme — ときには貴族だけでなく一部の市民も証書を作成する際に用いた肩書き」とある。
- (68) Deierkauf-Holsboer, *Le Théâtre de l'Hôtel de Bourgogne*, I, p. 192 ; Howe, *op. cit.*, p. 239.
- (69) Deierkauf-Holsboer, *Vie d'Alexandre Hardy*, p.202 ; Howe, *op. cit.*, p. 239 なお、Deierkauf-Holsboer

はラ・ポルト夫妻の脱退を記した文書の日付を12月30日としているが、12月13日とするのが正しい。そのことはHoweが指摘しているだけでなく、私自身もフランス国立文書館 Archives Nationales に保管されている文書により、直接確認していることである。

- (70) Virginia Scott, *Women on the stage in early modern France : 1540-1750*, Cambridge, Cambridge University Press, 2010, p. 90.
- (71) Deierkauf-Holsboer, *Vie d'Alexandre Hardy*, p.202-203 ; Howe, *op. cit.*, p. 239. なお、Deierkauf-Holsboerはこの文書の日付も12月30日としているが、12月13日とするのが正しい。3月29日の契約では脱退するには300リーヴル払わねばならないとなっていたが、2年間の契約期間のうちすでに一定期間が過ぎているなどの事情により、90リーヴルという金額に減額されたと思われる。
- (72) マリー・ヴェニエールは夫が引退した後も舞台に立ち続けたとする説もあるが、私は夫と共に引退したと考えている。その理由はすでに「フランス最初の女優たち」(6ページ、注24)で述べているので参照されたい。
- (73) 「勅許状」参照。
- (74) Deierkauf-Holsboer, *Le Théâtre de l'Hôtel de Bourgogne*, I, p. 80 et 200.
- (75) *Ibid.*, p. 80 et 201-202. このときマテューの肩書きは« l'un des 100 gentilshommes de la maison du roi » 「王室付き百人侍従の一人」と記されている。社会的にみれば出世と言えるだろう。内乱当時アンリ4世に仕えて戦ったことなど、王家に忠誠を尽くしたことが認められたのだろうか。「結婚契約書」のときの肩書きがécuyer (王や貴族の侍臣)であったこと、1609年8月29日の文書では« valet de chambre du prince de Condé » (コンデ大公の近習・従者)と称していること、さらに引退後には名誉回復のためにルイ13世から「勅許状」を賜っていることからみて、内乱終結後もマテュー・ルフューヴルが王家と関わりを維持していたと考えることができる。
- (76) Tallemant des Réaux, *Historiettes*, éd. Antoine Adam, Bibliothèque de la Pléiade, 2 vol., Paris, Gallimard, 1960-1961. Voir Tome I, note 2 de la page 257 (p. 1125). マテュー・ルフューヴルがいつ死んだか、正確な日付は不明である。しかし、マリーは1627年にはジャン・レモン夫人となっているので、それ以前に死んでいることは確かである。